

## ▶はじめに

最近の世界を見ますと、第三次世界大戦はすでに実質的に進行しているのかもしれませんが。その萌芽は例えば“イスラム国”の自爆テロに誘発された西欧各国の排外的なナショナリズムの台頭です。その象徴が、フランス極右政党の進出でしょう。ヴォルテールを代表とするフランスの知性、寛容なる精神はどこへ行ってしまったのか、と思えます。

一方ではアメリカ大統領候補トランプが「イスラム教徒はアメリカに入国させるな」と堂々と主張して多くの支持者を集めています。第二次大戦の独仏の激しい戦いの教訓の上に成立したEUも、イギリスが離脱するか国民投票に問う、という危機的な状況が生まれています。

ロシアはクリミヤを強奪し、ウクライナの西部では「ロシア人よ、出ていけ」という声が広がり、中東ではサウディアラビアとイラン両大国の断交、アジアではフィリピン海域の島々を巡る中国とアメリカのパワーゲームの応酬、そして北朝鮮の“水爆実験”など、世界のあらゆる地域で緊張した状況が続いています。

このような世界の状況を見るにつけて思うのは、一国単位で考える時代、一国単位で解決できるという時代はすでに終わっているにもかかわらず、国際的に解決していこうという考えが進んでいないように思われます。現在の国際連合もほとんど大国のエゴイズムを抑止することができていません。というより、大国の既得権益の上に成立している国際連合に、そもそも世界平和を希求する方が間違っているのかもしれませんが。

## ▶生きていた中国の国際主義的精神

「死の商人」たちの跳梁を阻止する可能性、その光と思わせたものが社会主義という思想でした。カール・マルクスの根底を支えたその思想こそが国際

主義であり、世界革命という思想です。一国で革命が成就してもその発展はいびつな形になります。レーニンが唱えた世界革命の光によってマルクスの思想は開花すると思われていましたがレーニン死後の後継争いでトロツキーが破れ、〈一国社会主義論〉のスターリンが勝利し歴史の歩みは後退しました。

しかし、1949年に成立した中華人民共和国は、新たな民衆の力と誇りを世界に呼び戻しました。1963年、残留した日本婦人の願いがあったとはいえ、ハルピン市郊外の方正県に建立された日本人公墓はその輝かしい中国の国際主義の生きた存在証明です。

ところが残念ながら、その国際主義的な精神も今は彼方に押しやられ、〈中華の夢〉なる中国ナショナリズムが台頭して、〈愛国主義〉が大手を振るっています。

村田忠禧・横浜国立大学名誉教授の研究によれば、ここ十数年に亘って人民日報から「国際主義」という言葉が消え、それに代わって「愛国主義」という言葉が頻出するようになったといえます。

かつて日本人でありながら八路軍に参加した飯白栄助さんは、若い中国青年から「小日本」「日本鬼子」とからかわれて喧嘩をした際、仲裁に入った幹部は中国青年を叱った後、飯白さんに「お前も民族意識が強すぎる。もっと国際主義の

精神を持て」と言われました。それほど末端の中国共産党幹部にも国際主義的精神は生きていたのです。しかし今は〈中華の夢〉、愛国主義が蔓延しているように思われます。中国共産党の輝ける国際主義的な精神は今、死に瀕しているといえます。これも国家が持つ宿命なのでしょうか。

国際主義も畢竟、国家の存在を前提としています。国家の要件としては領土、国民、主権という3つが満たされて初めて国家として認められます。そして国家間の争いとして挙げられるその筆頭こそ領土問題です。どのような理想主義的精神で建国さ

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」(I)  
——今こそ、国境を超えた人々の真の連帯、民衆的なたつなかりを——  
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』  
大類 善啓(おおるい よしひろ)

れた国家でも常に領土問題によって戦争が引き起こされます。

## ▶イスラエル建国にみる領土問題

1947年、放浪の運命を余儀なくされていたユダヤ人たちは念願の国家をパレスチナの地に建国しました。イスラエルです。しかしそれは、パレスチナにいた多くの人々を放逐することによって強権的に成立し、そのため建国直後に中東戦争が勃発しました。過去何度もあった中東戦争はアメリカ政府の強力な後押しによってイスラエルは勝利し続け、領土を一方向的に広げました。それによって今も周辺のアラブ諸国との争いに神経をすり減らしているのが現状です。

このイスラエル建国のバックボーンとなった思想がシオニズムと呼ばれるものです。〈故郷のシオンの丘に帰ろう〉と、離散したユダヤ人たちがパレスチナに帰り、イスラエル建国が成立しました。国際共通語を創造したユダヤ人のザメンホフも当初はシオニズムに共感していました。しかし、すぐに「シオニズムはユダヤ民族主義に他ならず、周辺のパレスチナの人々を追いやるだろう、これは離散するユダヤ人たちの真の解決にならない」とシオニズムから手を引きました。〈国家無くして領土なし、領土無くして国家なし〉といわれます。しかし、領土は常に近隣諸国にとって争いの種でした。その争いの種を封じるために軍隊を持ち、武器によってかろうじて争いを封印しているのが現実です。

## ▶「この世の大地は天からの借り物である」

果たして、この世の領土とは何なのでしょう。戦前の強権的な天皇制国家から徹底的に弾圧を受け、戦争中の6年近くを牢獄にいた大本(教)の教祖、出口王仁三郎は「この世の大地は天からの借り物である」と喝破しました。「日本という領土も神様から一時的に借り受けているものである」。そう考えるなら、「我が国固有の領土」なる発想などは出てこないはずと考えられます。

そもそも日本という名前がこの世に登場するのは、歴史家・網野善彦先生によれば、8世紀初頭に

勢力を振るっていた一族が、本州の西南部や九州の北部を巡って領土の支配を確立した時のようです。その最高権力者が「天の王」を意味する天皇という称号を与えられました。「日本」とは、ある特定の一族によって支配された政治的な単位だったといえます。

その後、歴史を経た幕藩体制では、薩摩や長州、肥後などの藩によって人々は考え方まで支配されていました。今でも、「日本は明治維新以来、長州人に支配されている」などと言う人がいたりします。確かに戦前はもとより、戦後でも、岸信介、宮本顕治(日本共産党の指導者だった、戦前長い獄中生活を強いられていました)など左右両翼に亘る政治指導者には長州人が目立ちます。

もしかしたら今でも地元の人々は、「長州人の末裔である」とか「我は薩摩隼人である」などと言って内心、近隣の他地域の人々を上からの目線で見、その差異を誇らしげに思っているのかもしれない。少なくとも、〈日本〉なる観念は、ほんの100有余年前の人々の心の中にはありませんでした。

## ▶「国」や「民族」という発想を超えよう

国際共通語であるエスペラントを創造したザメンホフは、国や民族ではなく、人類という発想を持ち、個人を出発点として考えていました。しかしザメンホフはなぜ国際共通語なるものを創ろうと考えたのでしょうか。

ルドヴィーゴ・ラザーロ・ザメンホフは1859年、現在はポーランドにあるヴィャリストクという町にユダヤ人として生まれました。当時のヴィャリストクはロシア帝国の支配下にあったリトアニアの地でした。当時のヴィャリストクでは、ユダヤ人(66%)、ポーランド人(18%)、ロシア人(8%)、ドイツ人(6%)、ウクライナ人(2%)という人口構成(田中克彦著『エスペラント—異端の言語』(岩波新書)であり、町の市場や通りに出れば、言葉の違いで誤解が生じ、実に些細なことで人々は罵り合っていました。

こういう状況を見ていたザメンホフは人々が共通語を使うことによって争いを止めようと考えたのです。

(次号に続く)